

Habt ihr Lust auf Deutsch? さあ、ドイツ語をやってみよう!

ドイツ語は、ヨーロッパの中心に位置するドイツをはじめ、オーストリア、スイスなどで公用語となっている言葉です。歴史的には英語と兄弟関係にある言葉で、英語と比較しながら勉強してゆくことができます。発音は英語よりも規則的で、むしろやさしいといえます。ぜひドイツ語を勉強して、ドイツ語圏の世界へ飛び込んでいってください! そこには、グリム童話に代表される自然と幻想に満ちた文学、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェンに代表される音楽、バイエルン・ミュンヘンに代表されるサッカー、ベンツやフォルクスワーゲンに代表される自動車など、日本ともかかわりの多い奥深い文化が待っているはずですよ。

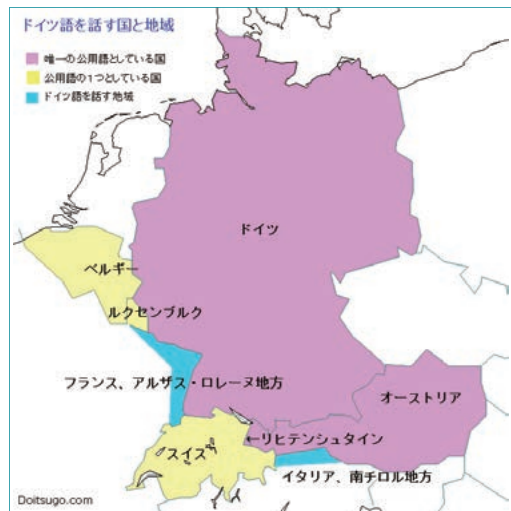
ドイツ語とは

新入生のみなさん!

明治学院大学の選択必修科目である初習外国語で、ドイツ語をとってみませんか? ドイツ語は、ドイツだけで使われているわけではありません。ドイツ以外にも、オーストリア、スイス、リヒテンシュタイン、ルクセンブルク、ベルギーでも公用語として使われており、EU (ヨーロッパ連合) 内でもっとも母国語人口の多い言葉です。ヨーロッパ文化を理解するうえで、ドイツ語は避けて通ることができない言葉であるといっても言い過ぎではないはずです。

ドイツ語は、インド=ヨーロッパ語族のなかのゲルマン語群に属しています。ゲルマン語群にはドイツ語のほかに、英語、オランダ語、デンマーク語、スウェーデン語、ノルウェー語などがあります。つまりドイツ語は、みなさんがすでに勉強している英語と親戚関係にある言葉なのです。ドイツ語と英語は二千年前まで同一言語であったと考えられています。英語との類似は、今日でもさまざまな観点からみてとることができます。単語のレベルではたとえば、英語のgoはドイツ語でgehen、comeはkommen、haveはhabenです。前置詞をしてみると英語のinはドイツ語でもin、toはzu、underはunterです。英語で現在完了形を作るときにはhaveと過去分詞を使いますが、ドイツ語でもhabenと過去分詞を使います。このようなドイツ語と英語の類似性から、ふたつの外国語を比較しながら勉強してゆくことができるのです。

もちろん似ている点ばかりではありません。ドイツ語には英語には存在しないさまざまな要素があり、文法規則は英語よりも複雑であるといえるかもしれません。しかしその分、発音は英語よりも規則的で、基本的にローマ字読みに近いので、英語よりも楽です。日本人の舌と口でも勇気をもって発音すれば、どんどん通じるものです。ぜひ明治学院大学でドイツ語を勉強して、ドイツ語圏を旅してみてください! あとで詳しく説明しますが、明治学院大学にはハンブルク大学との提携があり、短期および長期の留学プログラムが用意されていますよ。



ドイツ語圏

ドイツ語圏へ！

外国語を勉強するという事は、文法を学ぶことや語彙を学ぶことにつけるものではありません。その言語をはなす人々がいるのであり、その人々には文化があり歴史があります。その部分を切り離して外国語を学んでも、まったく意味がありません。ドイツ語を学びながら、ドイツ語圏の文化や歴史のさまざまな側面にふれていただきたいと思います。そこには、わたしたち日本人にもたいへん興味深いことがたくさんあります。ここでは、そのうちのいくつかの観点を紹介します。



ドイツ語圏へ！

グリム童話とメルヘンの伝統

ヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリムの兄弟が、ドイツの民衆の間で語り継がれてきたメルヘンを集めて編集したものがいわゆる『グリム童話』です。『グリム童話』のなかには「白雪姫」、「赤ずきんちゃん」、「ヘンゼルとグレーテル」など日本でもよく親しまれている物語があります。今日においても、古くから民衆が語り伝えてきたメルヘンには深い味わいがあり、その魅力は色あせることはありません。そこには、世代を越えて通用する民衆の知恵が保存されているからです。

グリム童話以外にも、ドイツ語圏には面白いメルヘンが数多くあります。たとえばE.T.Aホフマンはドイツ・ロマン派の重要なメルヘン作家です。ホフマンの『くるみ割り人形』は、チャイコフスキーのバレエの原作となったことからよく知られています。幻想的なメルヘンは、今日に至るまでドイツ文学の伝統のひとつとなっています。ミヒャエル・エンデの『モモ』や『はてしない物語』をご存知ですか？これらの作品は、『グリム童話』以来のドイツにおけるメルヘン文学の伝統の上にあります。また、20世紀を代表する小説家といってよいフランツ・カフカの文学は、「アンチ・メルヘン」とであると言われることがあります。カフカの代表作『変身』は、朝起きると毒虫に変身してしまっていた男の物語です。ハッピーエンドで終わることのない悪夢のような世界を描くカフカは、今日に至るまで世界中の文学に大きな影響を与えています。たとえば村上春樹の小説『海辺のカフカ』は、カフカの文学世界とさまざまな関係をむすんでいます。

音楽

ドイツ語圏では伝統的に音楽がさかんです。バッハ、ベートーヴェン、シューマン、ワーグナー、ブラームスはドイツの作曲家です。モーツァルト、シューベルト、ヨハン・シュトラウス、ブルックナー、マーラーはオーストリアの首都ウィーンで活躍しました。かれらの作品のなかには、ドイツ語のタイトルやドイツ語の歌詞を持つものがたくさんあります。ドイツ語が分かれば、クラシック音楽をより深く理解することができるはずです。バッハが生まれたのは1685年です。300年以上も前につくられた音楽が、今日でもわたしたちの心を打つのは



音楽

なんとも不思議で、素敵なことではありませんか。

モーツァルトやシューベルトが活躍したウィーンは、音楽の都と呼ばれています。ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のニューイヤー・コンサートは、日本でもお正月にテレビで放映されています。ウィーン少年合唱団も人気があります。ウィーンはまた、美術の都でもあり、素晴らしい美術館が複数あります。ぜひともいつか訪れていただきたい大変魅力的な都市です。とくに世紀末ウィーンを代表するグスタフ・クリムトの絵画は、一度見たら忘れられない独特な世界をつくりだしています。クリムトと同じ時代に、やはりウィーンで、ジークムント・フロイトによって精神分析学がつくりだされたことも付けくわえておきます。精神分析学のもう一人の重鎮カール・グスタフ・ユングはスイスの学者です。20世紀の深層心理学は、ドイツ語圏で生まれたのです。

ドイツ語圏の音楽文化は、もちろんクラシック音楽だけではなくありません。ドイツはテクノ・ポップの中心地でもあります。ドイツのデュッセルドルフで活動をはじめたテクノ・ポップの古典的グループであるクラフト・ワークの作品は、今日聞いても新鮮です。そのような下地もあり、ベルリンでは年に一度「ラヴ・パレード」というテクノ・ポップの祭りが開かれています。

プロテスタント

ドイツは、明治学院大学と深いかわりのあるプロテスタントが生まれた国です。ドイツの宗教者マルティン・ルターがカトリック教会に抗議するために書いた「95ヶ条の論題」（1517年）によって宗教改革が始まり、プロテスタント運動につながっていったことは、高校の歴史の授業などでお聞きになったことがあるでしょう。その過程でルターは、聖書をドイツ語へ翻訳します。それによってギリシア語原典やラテン語訳が読めなかった民衆も、聖書を読むことができるようになったのです。



ベルリン大聖堂

このルターのドイツ語訳聖書が、近代ドイツ語の発展に大きな影響を与えました。当時の最新メディア技術であったヨハネス・グーテンベルクの活版印刷術によって、ドイツ中に広くドイツ語訳聖書が広まったのがその一因です。

現在のドイツでは35%がプロテスタント系で36%がカトリック系です。ごくおおまかにいって、ベルリンに代表されるドイツの北半分がプロテスタント文化圏で、ミュンヘンに代表されるドイツの南半分がカトリック文化圏です。ちなみに他のドイツ語圏では、オーストリアがカトリック文化圏、スイスがカトリックおよびプロテスタント文化圏です。日本から見ると、プロテスタントもカトリックも同じキリスト教ではないかと思ってしまうがちですが、それぞれがまったく違った文化圏をつくりあげていることは、観察しながら旅行してみるとよく分かります。ひとびとの考え方の違いはもちろんですが、建築物や街の風景がそもそも非常に異なっているのです。

産業

ドイツはEUのなかで最大の経済大国で、経済的にもっとも豊かな国です。欧州中央銀行がフランクフルトにあるのは理由のないことではありません。ドイツで最も重要な産業はなんといっても自動車産業です。人口の七人に一人が自動車産業にかかわっているというデータもあります。メルセデス・ベンツ、BMW、フォルクスワーゲン、アウディ、ポルシェなどがドイツの車だということはご存知ですか？日本でもドイツ車は大人気です。輸入車の販売上位三つ（フォルクスワーゲン、メルセデス・ベンツ、BMW）はドイツ車です（当のドイツでは、日本車もそこそこ人気があるのですよ！）。



ベンツ

ドイツ南西に位置する街シュトゥットガルトへ行くと、メルセデス・ベンツの博物館があります。なかなか充実した展示内容ですから、ドイツへ行ったときには立ち寄ってみてください。

車以外の産業ではカメラのライカ、レンズの会社カール・ツァイス、スポーツ用品のアディダスやプーマ、電気シェーバーのブラウン、製薬会社のバイエルなども日本でよく知られている企業です。戸塚から近い鎌倉の路上を走っている江ノ電は、もともとはドイツのジーメンス社の鉄道技術で電車を走らせていました。案外わたしたちの身近なところで、ドイツの製品が使われているのです。

サッカー

ドイツ人の大好きなスポーツはサッカーです。日本のJリーグにあたるドイツのブンデス・リーガは、平均観客動員数で世界トップの数字を誇っています。大変盛り上がっているわけです。バイエルン・ミュンヘンやボルシア・ドルトムントのようにチャンピオンズ・リーグの常連となっている強豪チームもあります。ここ数年は、複数の日本の選手がドイツのブンデス・リーガでプレーしています。頼もしいですね。

ドイツのナショナル・チームの強さは、西ドイツ時代を含めて、ワールドカップで過去三回の優勝（1954年、1974年、1990年）、四回の準優勝を成し遂げていることからわかります。ブラジルのような華麗なプレーはあまりありませんが、フィジカルの強さと粘り、ここぞという場面の勝負強さがドイツ・サッカーの持ち味です。2000年代に入ってから移民の若い選手が増えて、スピードのある攻撃的なサッカーが特長として加わりました。ワールドカップでは2002年日韓大会で準優勝、2006年ドイツ大会と2010年南アフリカ大会で3位、そして2014年のブラジル大会では、フランス、ブラジル、アルゼンチンなどの強豪国を破り、4度目の優勝を果たしたことは記憶に新しいところでしょう。

余談になりますが、1954年のドイツのワールドカップ優勝をテーマにした『ベルンの奇蹟』（2003年）という映画があります。ドイツ人のサッカー好きがよく伝わってくる映画です。また、大ヒットしたドイツ映画『グッバイ・レーニン！』（2002年）では、1990年のワールドカップ優勝が、再統合したばかりの西と東のドイツ市民の融合に一役買ったことをあらわしているシーンがあります。これらの映画はDVDで観ることができますので、興味があったらぜひトライしてみてください。語学を学ぶうえで、その国の映画を観るのはとてもよい方法ですよ。

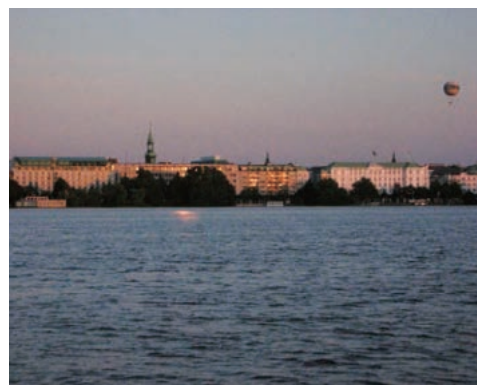
環境問題

ドイツはエコロジーの先進国です。廃棄物の分別回収と再利用にかんしては1990年代からとりくみが始まっていて、日本よりもずっと進んでいるといえます。廃棄物の発生そのものを避ける政策もあります。たとえばドイツでスーパーへ買い物に行くときは必ずマイ・バッグを持ってゆかなければなりません。ビニール袋が有料になっているからです。2000年ころからは飲料容器のデポジット制度が導入されました。ビンやペット・ボトルに預託金をかけて回収と再利用をさらに強化し、貴重な資源を大切に使うことが目的です。

環境都市として有名なのはドイツ南西の街フライブルクです。フライブルクは、大気汚染対策としてクルマ依存社会からの脱却をめざし、路面電車などの公共交通と自転車の利用を推進しています。市街地への自動車の乗り入れを制限して、路面電車と自転車を利用することを推奨しているのです。南ドイツは総じて自転車にやさしい社会で、自転車専用のレーンや信号が設置されている道路がたくさんあります。フライブルクはまた、自然エネルギーである太陽光発電の普及を積極的に進めています。現在フライブルクは、ドイツにおける太陽光発電の重要な開発・生産拠点となっています。



自転車レーン



ハンブルク夕景

明治学院大学のドイツ語

最後に明治学院大学のドイツ語科目を紹介します。明治学院大学では、選択必修科目の「ドイツ語1A・B」と「ドイツ語2A・B」で、それぞれ文法を中心とした授業とコミュニケーションを中心とした授業を受けます。そのほかにも選択科目の「ドイツ語研究」（2年生以上）、会話力の向上をめざす「特別演習ドイツ語」（1年生から）、留学への準備クラスである「ドイツ語特別研究」（1年生の秋学期から）があります。「ドイツ語特別研究」は、明治学院大学と協定しているドレスデン工科大学への短期留学の参加を想定しています。この短期留学では夏休みの約1ヶ月の間、ドイツ語を学ぶために世界中からドイツに集まっている様々な国の学生たちと一緒にドイツ語を勉強します。初めてドイツで暮らす外国人学生のために十分配慮されたプログラムです。さらにハンブルク大学またはトリアー大学での1年間の長期留学に挑戦することもできます。毎年、ドイツ語圏の短期留学では10名前後、長期留学では1～2名の学生がこの制度を利用しています。ハンザ同盟で知られる商業都市ハンブルク、文化の香り高い旧ザクセン王国の首都ドレスデン、ドイツという国よりも長い歴史があるローマ都市のトリアー、いずれも特色はまちまちながら、ドイツならではの魅力を備えた町です。これらの地で生活しながら勉強することは、一生の宝のような貴重な経験になるに違いありません。



ケルン大聖堂



1つ50セント



パンが美味しい!



出発!



定番のヴルスト



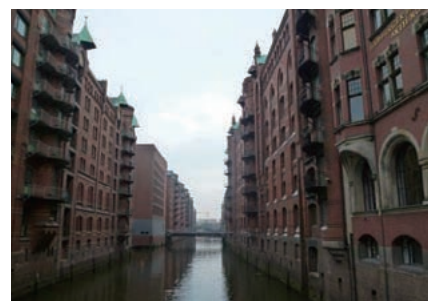
遠足の風景①



遠足の風景②

参考文献

明石真和『栄光のドイツ・サッカー物語』、大修館書店、2006年
 浜本隆志・高橋憲（編著）『現代ドイツを知るための62章』、明石書店、2013年
 多和田葉子『エクソフォニー—母語の外へ出る旅』、岩波書店、2004年
 手塚富雄『ドイツ文学案内』、岩波文庫、1963年
 仲正昌樹『日本とドイツ 二つの戦後思想』、光文社新書、2005年
 三島憲一『戦後ドイツ—その知的歴史』、岩波新書、1991年



ハンブルク倉庫街

さようなら。また会いましょう! — Auf Wiedersehen!